本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄 改版 特價送料共 金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領 仝 金貳圓拾錢
一法華經要義 仝 金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓 仝 金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要 仝 金貳圓九拾錢

礒部滿事謹輯
一本多日生上人 特價送料共 金壹圓七拾錢

申込所 東京市外南品川妙國寺境内 「統一」發行所 振替東京五一〇七一番

一月刊「教」誌 定價一冊 金拾錢 送料 金五厘 一ヶ年前金 送料共 金壹圓貳拾錢

申込所 東京市外南品川妙國寺境内 「教」發行所 振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料五厘
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共 前金之事
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

統一廣告料
表紙一頁 金貳拾圓 前金之事
一頁 金拾五圓
半頁 金九圓
四分一頁 金五圓

昭和七年七月廿四日印刷納本
昭和七年八月一日發行 (第四百四十九號)

編輯兼發行人 礒部滿事
印刷人 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地 都印刷所 電話高輪六〇二四番

發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地 財團法人統一團 振替東京九四二〇番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

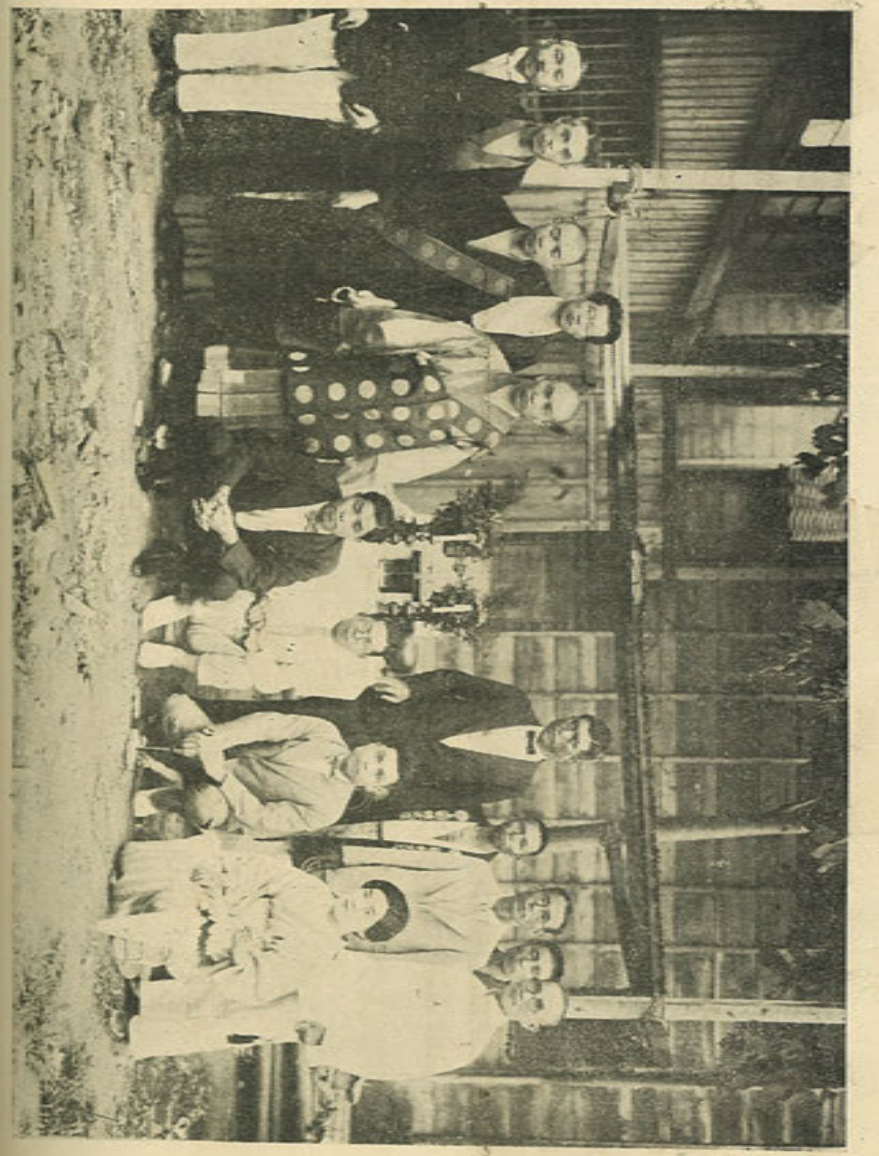
不許複製

目次

法華經の信解（其四）……日生上人
所感……小林一郎
偶語……岩野直英
釋尊と統一開顯の大教……和賀義見
阿含の根柢を探りて……中村清一
記事
○本團團報及團則
○教報 ○團費誌料領收

第三十七年九月號

財團法人 統一團發行



法華經の信解（其四）

目次

三、佛教に對する誤解

日生上人

法華經に於てその意味合は最も能く現れて居る、譬喩品に、

我が此の法印は世間を利益せんと欲するをもつての故に說く。

と明かに說かれて居る。「我が此の法印」といふのは、法華經で言へば諸法實相印と申して、この宇宙の高遠微妙なる妙法を指すのである。さういふやうな高い哲學的の眞理又宗教的の眞理を說くことも、それがこの人生から離れて行くのではない、この世間を利益せんと欲するをもつての故に、その高い哲學や宗教を說くのである、緣が離れたやうに見えて而もそれが直接利益を成すのである。お佛壇には朝起きたら先づ一番にお燈明を上げよといふやうなことでも、いきなり起きたら店に出て坐つて居つて「入つしやい〳〵」と言つて客を呼ぶよりも、先づ佛壇にお燈明を上げる方が宜しいといふのである。今のやり方では、お燈明などを上げて居つたら何ぼうか損が行く、それより早く店を開けて、兎に角お客が來たら「入つしやい〳〵」とやつて居れば、お燈明を上げて居る間に三人ぐらゐはお客が來るだらう、その方が餘程得だと思つて、宗教の信仰ナンといふものは商賣に必要がないと思つて居る。併なが

らそれが永遠に對しては、たゞ我慾一點張で商賣をして居るよりも、佛壇に燈明を上げるやうな氣分のある方が、その家の爲に、又その商賣の發展の爲にも宜しいといふ、微妙な關係がそこにあるのである。だから釋尊が法華經のやうな高い諸法實相をお敎へなさることが、それが政治を導き、經濟を導き、人類の文化生活を導く力となるからして、『我が此の法印は世間を利益せんと欲するをもつての故に說く』といふことになるのである。

その意味合がわからない輩が、佛敎を厭世的だといふやうなことを一概に言ふのである。法華經にも譬喩品の初めには四苦八苦といふことを說き、三界は火宅の如しと說かれて居る、三界火宅と言つたならば、釋迦は現世は火事が行つて居る家だと言つたから厭世的だと言ふけれども、さうではない、火事が行き居るといふことを知らなければ、眞に人生の幸福といふものは無いのである。自己の欲望のみに沒頭して居るやうな人間が寄り集つたのでは、世の中の幸福は無い、世の中は缺點多きものである、憐れな者が多い、これを如何にして救つてやらうかといふ救濟の方に廻る人が居つてこそ、始めて世の中はうまく行くのである。子供が玩具に氣を取れて居るやうな具合にたゝワイ〳〵言つて「その人形をこつちへ寄せ」、「いや俺のものだ」と言つて喧嘩をして居る、さうして椽の下に火が廻つて居ることを知らないやうな者ばかりであつたならば、總ての者は遂に皆な燒け死んでしまはなければならぬ。それはその遊びも面白からうけれども、椽の下には火が廻つて居るぞ、一旦門の外に出て來いよと言つてその遊びを一緒になつてしないのみでなく、そんな事柄は眼中に置かないで、憐れな子供を救はんが爲に働く者が居つてこそ、始めて人生といふものは救はれて行くのである

その玩具に氣を取られて居る者を敎へ導き、救濟をする人間を造る爲に、釋迦牟尼の敎といふものは出來て居る。儒者などといふものはその玩具を一緒になつに奪合つて爭うて居るから、佛敎が厭世敎だと斯う申すのである、さういふ低い思想は、將來日本人の大いに警しむべき所である。だから今の世の中では、例へば正月早々から、人間といふものは何時死ぬかわからぬ、僕の友人は元日に死んだといふやうな話をすれば、「イヤー緣起が惡い、鹽を振れ鶴亀々々」といふやうな調子で、落語家が話をするやうに、「死」といふ字を非常に忌み嫌つて、數字の四でも「よん」と言ふ、「四十四番」と言はないで「よん十よん番」と言ふ、それは死といふものを非常に恐れる結果、緣起を擔いでそんなことを言ふので、實に幼稚な觀念である。そこで正月になつたならば黑豆にごまめ、鶴龜といふやうなことばかり言つて居れば、いつ迄も生きて居るやうに思つて居る。そんな幼稚な、徒に死といふものに對して逃げ廻るやうなことでどうなるか、本當に考へたならば、人間は元日であらうが誕生日であらうが、何時死が來るものかわからぬ、けれどもそれに備ふる用意は既に成れりといふことでなくてはならぬ。正月が近づいてまだ餅は搗いてなくとも、生死無常に備へるだけの心の準備は既に成れるものである、餅は餅屋から持つて來ないからまだお鏡餅は飾つてないけれども、生死の問題ならば誰の手を煩すまでもな

く、たゞ一心合掌の玆に準備は成れりといふことがなければ、一人前の人間とは言へないではないか。それを無暗に死といふものを恐れて、その聯想から坊さんは縁起が惡いといふことを一番に言ふ　先年御大典の時にも、天皇陛下の御即位の御目出度い式に坊さんが出て來ては縁起が惡い、だから法衣を着て來てはいけない、洋服ならば宜しいといふ、さういふことを大禮使が言つたといふ、それ程日本人は大きな馬鹿になつて居る。それを又坊さんの方でもさうかなと思つて、平生は法衣を着て居りながら、御大禮の時にはこれが穢れて居るやうに思つて着て行かない。第一袈裟は喪章のやうなものを附けて居るからいかぬと言ふ、實に馬鹿氣たことである。これは喪章ではない、立派な佛教の法服ではないか。宗教固有の法服をいかぬと言つて皆な脱いでしまつて、さうして御大禮の時には納所坊主が着るやうな木欄の五條に麻の法衣を着て、各宗の管長が參列したのであるが、あの時の恰好といふものは成つて居ない、皆な納所坊主が列んだやうであつた。私だけはちやんと宗旨の制服といふものがあるのであるから、紫の法衣に赤い袈裟を掛けて參列した。それは縁起も穢れも何も無い、御即位の時であらうがお葬式の時であらうが、佛教から見たら同じものである。それが非常に違ふと思つて、お葬式の時は穢れて居る、御即位の時は何もかも目出度いといふのは、たゞ日本の在來の傳統的の薄つぺらな思想ナンである。「正月の元日はお佛壇の扉を閉めて置け」といふやうなことを能く言ふ、そんな馬鹿々々しいことでは人生は有たない。

であるからさういふ幼稚な頭腦から佛教を、厭世的だと言つたやうな批評、は餘程割引をして考へなければならぬ。又思想の根柢といふものが、それを厭世的であると見る所に大きな間違ひがある、彼等の非難の難點に誤謬があるといふことを、私は考へて置きたいと思ふ。釋尊は人世の爲に非常に働かれた人で、寧ろ非常な積極的な方である。釋尊は自ら「世間解」と名乘つて、世間の事を別に捨てたものではない、又「世尊」と言つて、世の中へ世の中へと踏出して、本當に草鞋を履いて人間の巷に出て奮鬪したるところの宗教家である、人の居る所へ〳〵と寄つて行かれた。だから一番最初、修行の初めに跋伽婆仙人を訪ねた時の話でも、跋伽婆は斷食といふことを勸めた、その時釋尊（悉達太子）は眞先にこれに反對をせられた。自分は衆生の邊に於て、多〳〵の人達の側にあつてこれを教化しようとするのに、自分が斷食をしてヒョロ〳〵になるやうなことでは人を救ふことは出來ない、だからそんな馬鹿な事はやめちやと言つて反對したのが、一番最初の問答である。衆生の邊に於て慈悲を行はんとするといふことが、釋尊の根本の發願である、世の中を捨てゝどうといふやうなことではない。人生に起る四苦八苦といふものを救ふが爲には、先づ人間の慾望といふものを抑制してかゝらなければならない、『我我所の執』と言つて、「俺が〳〵」といふことゝ、「これは俺のものぢや」といふこと、即ち我といふ自我と、我所といふ所謂所有權の爲にあらゆる、人生の苦しみが起るのである、『諸苦所因貪欲爲本』と言つて、諸〳〵の苦しみの因となる所は貪欲を本と爲すのである、その貪欲といふものは、今申す

我我所の執着から起つて、そこに物慾旺盛なるが爲に、自分も苦しみ、社會も混濁となるのであるから、この人間の慾望を程良く調節し節制しない限りには、眞の幸福といふものは生れて來ない。

これは一軒の家の内で考へてもさうである、親子夫婦兄弟の關係でも、亭主は卑しき慾望の儘に動いて夜は遲くまで遊び歩く、女房は又女房で毎晩芝居を觀に行つて遊び歩いて居る、息子も負けずにカフエーにばかり行つて居る、娘は娘でダンスに出懸けるといふ風になつて、皆な遊びたい放題の人間の慾望を突張り合つて居つたならば、家庭の中は絶えず風波が絶えない、夫婦喧嘩ばかりして、さうして家賃も拂へないやうなことになつて店立を食つて、遂には首を吊らなければならぬやうな事が出來て來る。であるからさういふ慾望を制限して、お互に犧牲の精神を以つて、亭主は自分が一人で働いた金だけれども、自分が一番に儉約をする、自分の飲むべき酒をやめて、女房に「鮨の一つも食べるが宜い」といふことになるから、そこで女房の方でも遠慮をして「今日はまアお茶漬で濟ましておきませう」といふことになつて、その慾望を互に制限する所に眞の幸福はあるのである。それを、茶漬を食ふといふやうなことは厭世的ぢや……何も厭世的のことはない、人間の慾望を節する所に、眞の幸福を產出す積極的の力がある、その大本を釋尊は敎へたものである。

それから更に佛敎に對する誤解は、非國家的の敎であるといふことである。佛敎は國家を忘れた敎である、たゞ死んで極樂に行きさへすれば宜いのだから、あとは野となれ山となれ、國などはかまはぬといふ風な敎だといふのであるが、これも非常な間違ひである。法華經に依れば、

俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說かんも、皆正法に順ず。

と申して、世間の道德で敎へて居るところの親に孝、君に忠といふやうな事柄も、或は世の中を治める政治や法律、又人間の生活を資くるところの產業も、皆な佛敎はこれを大切にするものだといふことになつて居る。佛敎一つあつたならば、世の道德も要らぬ、政治も要らぬ、經濟も要らぬといふやうな亂暴なことを言ふものではない。だから「一乘の敎」と言つて、さういふ宗敎も政治も產業も、皆な協力するといふことが釋尊の大理想である。その細かい事は法華部の大薩遲經の王論品あたりに詳しく說かれて居る。

その思想が流れて日蓮聖人の立正安國論となつて、『先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべきなり、國亡び人滅びなば佛をば誰か信ずべき、法をば誰か崇むべきや』といふ風に、先づ國家を祈るといふことを大事にして敎を立てられた。それは日蓮聖人の新發明ではない、法華經の思想、即ち法華部の大薩遲經あたりに說かれて居る思想がそこに及んで居るのである。さうしてこれが又佛敎一般の思想である、法華部に限つたものではない、阿含經の中に戻つても、國家を擁護するといふことは盛に說かれて居る、國家不衰の七法と言つて、國が衰へないやうにして行く七つの事柄といふやうなことは、釋尊の說敎では到る處に說かれたことである。

であるから佛教が非國家的であるといふやうなことを言つたのは、それはたゞ宗派の流弊を見て、例へば淨土門一流が、たゞ死んで極樂に行きたいといふので、厭離穢土欣求淨土などといふ言葉を盛に言うて、この人生國家を穢土と言つて嫌ひ、彌陀の世界を淨土と言つて憧れて居る、あゝいふ考を以つて直に佛教が非國家的であると速斷してしまつたのである。その淨土門の主張が善いか惡いか、それが果して眞の佛法かどうかといふことも研究しないで、たゞさういふ宗派の流弊にのみ目を注いで、さうして佛教は非國家的ぢやと言つたのであつて、佛教の本質教義たる法華經であるとか、阿含經、仁王經、守護國界主經等の、多くの佛教に於て國家との關係を說明せられて居る經典が如何に說いて居るか、少しもそれ等を調べたものではない。たゞ無茶苦茶に佛教の惡口を言ひさへすれば宜いといふ考で、非國家的であるといふやうな惡口を言つたものである。

さうして世間の多くは、今尙ほさういふ經典を本氣で調べようともしない。それを調べる氣にならない間は、日本の文明は健全に戻らないと私は斷言するのである。聖德太子や桓武天皇の御代のやうに、モツと〳〵皇室を始め學界に於ても、一般の風潮に於ても、佛教を大に尊重しなければいかぬ。世界を見渡しても何れの國と雖も、宗教といふものを日本が考へて居るやうな冷かな觀方をして居る國は恐らく無からうと思ふ。

露西亞などが宗教を撲滅したやうな狀態になつて居るけれども、その內彼等も覺醒めて、必ずや宗教

の復活運動を起すに違ひない。神田駿河臺のニコライ會堂が震災で破壞したのを、この頃修繕をし始めて居るやうであるが、やはりあゝいふ風に露西亞の國も覺醒めて來るであらう。表面には宗教を用ひて居ないやうであるけれども、或る人達の報告に依ると、西伯利邊りに於て一番に復興したのはお寺であるといふことを聞いて居る。その地の秩序が回復するのは、表向は寺といふことを言うて居らぬやうだけれども、やはり有志者が寄つて一堂に集つて宗教の儀式を行ふやうになつて、始めて人氣も靜り、秩序も立つて來るといふことである。

それであるから國家と宗教といふことは餘程重大なる關係のあるものであつて、家庭で言うても、佛壇を賣つてしまはうか、お寺に行かぬやうにしてしまはうか、珠數を切つてしまはうかといふことになつたら、それが直接自分の商賣には關係が無いやうだけれども、家族悉く掌を合せるところの中心が無くなつた結果は、必ずやそこに人格の腐敗、秩序の混亂が起つて、その次には家が亡びてしまふであらう。それと同じやうに、佛教を非國家的であるなどと言つて惡口を言うて居るよりも、國家が非宗教的になつて居ることを懺悔する方が、今日は急務ではなからうかと思ふのである。

それから更に佛教は非倫理的の教であると言はれて居る。排佛論者は口を揃へて、佛教は人倫を破却するものであると言ふのであるが、これ亦實に無學の致す所であつて、法華經に依れば、勸發品の四法成就の所に於ても、

一には諸佛に護念せられ、二には諸〳〵の德本を植ゑ、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發す。

とあつて、四つの中に於て、佛に護られて居るといふことが一つ、それが即ち宗教の信仰である、あとの三つの、諸〳〵の道德を行ふこと、正しき團結に加はること、衆生を救ふの心といふことは、これ皆な道德である。慈悲の心と、正義の心と、廣く道德を行はんとする精神を包括して、この三つに纏めて居る。それに佛に護られて居るといふ宗教的の觀念を加へて、この四つが法華經の全體であると言はれて居る位である、信仰の心と道德の心、それが法華經の全部である。であるからそれを非倫理的だナンといふのは、よく〳〵思ひ切つて言うたものである。

抑々佛教の最初の出發點は、

諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教。

といふことが、一番簡單に佛教の生命を言ひ表した言葉である。『諸惡作すこと莫かれ、衆善を奉行せよ、自ら其の意を淨うす、是れ諸佛の教』これ即ち道德ではないか、それを非倫理的だナンといふのは、どこを見て言ふのであるか。

成程或る宗旨の如く、佛樣に縋つて居れば、どんな惡い事をしても救けてやるといふやうな言葉だけを取つて、人間の道德も知識も何も要らない、佛に縋りさへすれば宜いといふやうなことは、それは非倫理的である。そんな教だけが佛教の全部ならば、成程さういふ事も言へるかも知れぬ、併ながらこの偉大なる佛教を研究するのに、或る一宗一派の左樣な偏つた出來損うたやうな事を捉へて、それが佛教の全部であると速斷するのは、隨分ものを誣ひた議論である。姑婆でもそれ程性根は惡くない、日本の學者は佛教に對しては、姑婆以上に性が惡いと言はなければならぬ。どうしてもこれは閻魔樣の御厄介にならなければ埒があくまい、今頃は大分澤山地獄に行つて居るだらうと思ふ。それは佛教に說かれるが如く、佛教破却の罪大なり、謗法の罪許すべからずとしたならば、氣の毒ながらそれ等の人は、今頃は思ひ知るやうなことになつて居る筈である。吾々正しき信仰に居る者は、日蓮聖人が如說修行鈔に言はれた通り『その時如何に不憫に思はんずらん』と彼等を見下す時がある。又教はそれだけの權威がなければならぬ。何時までも眼が醒めなければ、どうしてもその方へ廻すより仕方がない、モッと人間は眞面目に教の事を考へなければいかぬ。若しも佛教が彼等の言ふが如く非國家的のものならば、吾々が先づ協力して、そんな教は撲滅してしまふべきである。

これを大薩遮經等に就て見れば、道德上の問題は實に詳しく說かれて居る、有名な四恩の說の如きも明かになつて居る。大體佛教ぐらゐ人間の心の吟味をして、一切の煩惱を分解して善と惡との上に就て詳しい說明を與へたものは無いのである。細かく言へば百八の煩惱を算へてこれを誡め、さうして正しき淨い心に還らしめんとするものである。それは決して儒者などが言ふやうな粗末な議論ではない。報

恩主義の道德を掲げて、精神の根本よりこれを導いて行く狀態は、實に堂々たる、道德上の研究としても一科の學を成して居るもので、他のものを定規として、佛敎をちよつと參考に少しばかり引張つて來て批判をするといふやうなものではない。佛敎倫理といふものは、特別にそれだけの學科として組織立つて研究すべき價値のあるものである。

それから又佛敎が迷信的の敎であると言ふ者がある、それは舊い昔の敎である、三千年も前の野蠻の時代に印度に行れた敎である、黑奴の敎であるが故に、そんな敎はつまらないものだといふやうなことを速斷して言ふのであるが、左樣なことを臆面もなく言ふほど、今の日本は野蠻な馬鹿が居るのである。印度の當時の文明がどの程度に進んで居つたかといふことを考へたならば、そんな事の言へた話ではない、その證據には、それ等の人が今日法華經を救けて見てもわからぬではないか、えらさうな事を言つたところが、そんな事を言うて居る輩が、法華經に說かれて居る事柄を讀んで見ても了解が出來ぬくらゐ低い頭腦ではないか。法華經のやうなお經ばかりではない、或は圓覺經を讀んでも、維摩經を讀んでも了解が出來ないで困つて居るではないか。そんな低い頭腦を以つて、佛敎が野蠻時代の遺物であるとか、迷信であるとか……何を言つて居るのであるか。今の日本の社會の方が寧ろ迷信が多いではないか、大體宗敎などは無くとも世の中が治まるナンといふことが、政治や學問に附隨して居る大きな迷信ではないか。人間が現世の事だけしか考へないナンといふのは、現世執着、現世惑溺の大迷信ではないか。モツと人間といふものは精神的に考へて始めて一人前であると思ふ。

その點に於ては佛敎の如きは裏も表も能く說いて、即ち法華經の中には「種々の緣を以つて正見を得せしむ」とお說きになつて、あらゆる手段を講じて、愚かな者にまで正見といふ正しき見識、正しき信仰、正しき理解をお與へ下されたものである。その「種々の緣を以つて正見を得しむ」と言はれる正しき見識といふ中には、それはこれを押擴げて行けば、婆羅門敎が有つて居るやうな迷信を匡正し、又世俗の政治家が有つて居るやうなたゞ政治萬能の考、或はたゞ物質生產のみを盛にすれば世の中が幸福になると思ふやうな思想もやはり邪見である。所謂斷常の二見と言つて、斷見と常見といふ大きな間違ひがある。この物質文化にのみ惑溺し、現世思想にのみ膠着して居るのも一種の偏傾的迷信である。釋迦如來はさういふ婆羅門のやうな宗敎の迷信をも匡正するが如くに、世俗の一般凡夫の妄想をも打破して、これを正見に來らしめ、深く因果の理を信ぜしめ、一實の道を信ぜしめ、尊き御佛を知しめ給うたところの、正見正解の敎を立てられたものが佛敎である。

その佛敎に對して迷信ナンといふことを言ひ得るほどのえらい人間は日本に居りはしない。佛敎の方から、お前の考は大分宜しいと許されたならば、寧ろこれ程結構なことは無いのである、釋尊の前に出て「お前もどうか斯うか一人前ぢや」と言はれたら、實に感激に堪へない光榮の至りである。釋尊に對して「あなたの敎は迷信です」などと言ふ資格が人間にあるか。この偉大なる宗敎を與へられた御佛

に對し、これを迷信などと言ふならば、天を地ちやと言ふのも同じことである。釋尊が迷の根源だと言ふならば、さう言ふ自分はどれ程悟つて居るか、已れの方が迷の魂りではないか、まるで算盤の桁が違つてしまふ、モツと正直に佛の教を能く學ばなければいかぬ。佛法の中には廣くいろ〳〵方便の應用があるから、方便の末に流れゝば、そこに疑惑の起る點もあらうけれども、それは釋迦自ら能くお說きなされて居る通り、衆生を救はんが爲の故に種々に方便力を應用したのである、併しそれは衆生教化の手段であるから、我が眞實の教に歸り來れよといふことを懇々と教へられた。その眞實の教である、法華經に來つて何處に疑惑があるか、何處が宗教上の迷信であるかといふことを能く考へて見なければならぬ。

先づ以上擧げたやうないろ〳〵の佛教に對する誤解といふものを最初に一掃して、さうして法華經に進む必要があらうと思ふ。法華經を見れば、佛教は決して厭世教でもなく、非國家的の教でもなく、非倫理的のものでもなく、迷信でもない、實に理想的な立派な宗教であるといふことが明かにわかるのである。（次號）

はかりなく　數なき代々を　つくしても
一たび聞くは　かたき法なり

俊成

左掲の二題は先月十六日統一團の財團法人許可報告式の際に、來賓所感としてお述べになつたものであります。（文責在記者）

所感

文學士　小林一郎

今日は態々お招きを受けまして洵に有難う存じます。私は本多上人とは隨分長い間の御交際でありまして、御生前に於て常にお教を受けて居つたのでありますが、今日に於ても本多上人の仰せられた事を想ひ出しまして、常に自分を鞭撻して居ります。上人の御精神を承け傳へらしたこの統一團が、今後健全な發達をなさつて、又私などにいろ〳〵な教をお與へ下さるであらうと存じまして、豫め御禮を申上げて置きます。

只今井上男爵からお話のありましたやうに、我國の現在の狀態は甚だ困つた狀態であるのでありますが、併しながら困つたと氣が附けば困らないやうになるに相違ない。ところが多くの人は困つたといふことをあまり考へて居ない、口では言つて居るけれども實際困るやうな樣子をして居ない。金が無い〳〵といふことは頻に言つて居るのですが、銀座通りなどを歩いて見ると、金が無いやうな樣子はチツとも見えない、照明はだん〳〵明るくなつて來る、ジャズの音はだん〳〵高くなつて來る。困るといふのは何が困るのかチツともわからない。どうも考へと口先と違つて居るやうでありますが、コヽの所に眼が覺めれば何とでもなるだらうと思ふ。

日本人といふものは決して頭腦の惡い國民ではないと思ふ。私は外國へ行かない前は、西洋人とい

ふものは餘程偉い者だと思つて居つたが、極く短い間歩いて見ましたけれども、なにもびつくりする事はありはしない、餘程不器用な者です。殊に英吉利人ナンといふものは馬鹿々々しく不器用なもので す、買物をしに行つて包を絲で縛つて貰はうと思ふと、英吉利人はナカ〳〵縛れない、面倒くさいから引たくつて自分で縛つて持つて來る。尤も絲が縛れたから偉いといふ譯ではありませぬけれども、それは一例であつて、そんなに西洋人といふものは驚いた者ではない。唯彼等は長い間、國と國と竝び立つて競爭して居るものであるから、ウッカリすると隣國に敗けてしまふ、ウッカリすると潰れるといふことを、誰も敎へなくても事實で知つて居る。そこが強味である。日本は斯ういふ仙人の住む島みたいな國であつて、ついこの頃までは樂であつたものであるから、苦んだ經驗が無い、又苦しい〳〵と言つても苦しいやうな氣分が起きない。それはまア有難い事ですが、將來國を發達させる上に於ては大變な憾みであると思ひます。モットお互ひが苦しい心持にならなければいかぬ。

甚だ亂暴な事を言ふやうでありますが、一體日本國民全體がこの國を護らうといふ決心が有るか無いかといふと、今の所は無いのです。無いのは無理はない、さういふ羽目に今まで遭つたことが無い。明治維新の頃までは武士が萬事やつて居つた、武士といふものは國民の何分の一か知れぬですが、兎に角鎌倉時代から明治維新の頃まで、約そ六百年ばかりの間といふものは、皆武士がやつて居つた。百姓や町人といふものは、商人は算盤を彈いて居れば宜かつた、百姓は鋤鍬を執つて居れば宜かつた。モウ國といふものが有るか無いか、そんな事はてんで考へて居ない、それで濟んで居つた。明治維新の仕事といつてもあれは武士がやつた、明治維新に依つて將軍樣が無くなり、お大名が無くなつて四海平等になつた、歴史家はさう書いて居るけれども、維新の事業は誰がやつたか、それは武士が皆やつた。薩摩の武士、又は長州の武士、方々の武士がやつたので、さうして德川幕府を倒して天皇親ら政治をなさることになつた。それから明治以後に於て西洋へ行つて、西洋の學問を取入れて日本を新しくする仕事は誰がやつたか、皆武士がやつた、吾々の先輩とかいろ〳〵の學者は皆武士か、若くは武士の子供である。さう言ふと武士以外の人の惡口を言ふやうだけれども、私も平民だから、自分の惡口を言ふのだからかまはないと思つて言ふが、實際武士がやつて居つた。一般の國民といふものは國ナンといふことを考へはしない、又考へる必要もなかつたのであります。

所が今になつて見るとさう行かない、皆が國の事を考へなければ國は立ち行かない。それだから日本國民が頭腦が惡いのではないけれども、あまり前が樂過ぎたものであるから、今でも本當に大責任を負ふといふ覺悟が足らぬ。そこをお互ひが考へなければいけないと思ふ。西洋の人間はさう感心するやうな人間ではないけれども、兎に角長い間自分達の力で自分の國を護ることをやつて來た。日本では鎌倉時代に封建制度が始まつたけれども、歐羅巴ではその頃に封建制度が倒れてしまつて、皆村の事は村の人が自分でやる、町の事は町の人が自分でやるといふやうになつて、さうして今日に及んで居る。だから西洋の人間は頭腦は良くはないけれども、覺悟が相當にある。日本人は頭腦は惡くはないけれども なんだか暢氣だ。そこに相違がある。

今日に於きましてお互ひが考へなければならぬことはそれである。日蓮聖人が『我日本の柱とならん』と仰しやつたことは、日蓮聖人一人のことではない。吾々が皆日本の柱となる積りでなければいけない。どうも無責任だ。「昨夕銀座通りへ行つたら大

變賑かで、押されて汗だらけになつて歸つて來てガッカリした」と言ふ、押されて困ると言つても誰が押すのだ、自分達が出て行つて押すのではないか、皆家に引込んで居れば人込みは出來はしない。自分が出て行つて人込みを拵へて、「押されて迷惑した」と言ふ。これは實に無責任な話である。皆そんなやうな考で居る。「今の世の中は正直では通れない」と言ふ。その今の世の中は誰が造つて居る？　自分達が造つて居るのではないか、皆が正直になれば正直で通れる。「今日の會合は何時ですか」「三時だといふから四時になりませう」と言ふ。誰が四時にする？　皆が四時に來るから四時になる。さういふ風で何事でも責任といふ考が非常に足らない。これはなにも日本人が惡い國民だからではないけれども、前に申上げたやうに、長い間責任ある地位に立たなかつたものであるから、その癖がズッと遺つて居る。今日はそこに眼が覺めなければいけない。國民全部の力に依つてこの國は保つて行くのであるから、この國中の一人だつて縫の弱んだ奴があつたら、それから國は弱んで來るといふ心持を、確かり有たなければいけない。

西洋人が皆偉い譯ではないけれども、西洋へ行つて見るとその點は感心です。私は獨逸に居つて感心した事がある。私は獨逸の漢堡から船に乘つて亞米利加に行かうと思つた、それはナニモ獨逸を最負にする譯ではないけれども、獨逸の船は割合に金が安くてサービスが良いといふことを聞いたから、それなら結構、獨逸の船に乘らうと思つて、それからホテルのおかみさんに頼んで船會社へ聽いて貰つた、さうしたら丁度それは秋の初めでありまして、亞米利加へ行く人が非常に多い時であつたから、モウ船室が無い、一月ぐらゐ待てば良い部屋が出來ると言ふ。私は一月も待つて居られない、十二月までには日本へ歸らなければならぬから、そんなに待つて居られない、「それでは僕はモウ一週間ばかりで獨逸を立つて英吉利へ行つて、英吉利のサザンプトンから船に乘つて亞米利加へ渡る」と言つて、その話は打切つてしまつた。さうすると翌朝食堂へ行つて朝飯を食べて居ると、おかみさんが出て來て「小林さん」「なんです」「あなた何とかして獨逸にモウ少し居て、獨逸の船に乘つて亞米利加へ行く譯に行きませんか」と言ふ、「それはいけない、僕は十二月一パイに日本へ歸らなければならぬ」「あゝさうですか」と言つて行つてしまつた。翌日の朝食堂で飯を食つて居ると、又おかみさんが出て來て「小林さん」と言ふ、「なんです」「何とか工夫して獨逸から船に乘る譯に行きませんか」「それは駄目です」又翌日の朝「小林さん……」「モウわかつて居る、船のことだらう」「その通りです、なんとかして獨逸の船に……」と言つて、私が宿を立つまで毎朝〳〵々々同じ事を言つて居る。出來なくても言ふ。獨逸人は「やつて見る」といふ諺があつて、何でも言つて見る、結婚をするのでも、あのお嬢さんを自分に呉れないだらうとは思つても「呉れないか」と聽いて見る。斷はられてももと〳〵、それども呉れるかも知れぬ。斯ういふ譯で、それはまア押の強いといふやうな變な所もありますけれども、兎に角根氣が良い、ナンボ出來なくても終ひまでやつて見る。さういふ事が日本人には無い、日本人はいゝ加減で止めてしまふ。言ひ出して斷られさうだと言ひ出さないで引込んでしまふ。そこは日本人は上品だけれども、仕事をする上に於てはそれではいかぬ、やつて見ないで止めてしまふといふやうなことでは、逆も何も出來るものではない。上品と言へば上品だけれども、無氣力と言へば無氣力です、自分のすべき事をやらない、十分の力を盡さない、それが甚たいかぬのです。

今の世の中はそれでだん〳〵崩れて行きます、誰

にでも會つて聽いて見ると相當に憤慨して居る、「これでは駄目だ」と皆言つて居る。駄目ならどうするか、「誰か何とかして呉れるだらう」と言つてやつて居る。誰も何ともして呉れない。さういふやうな氣分を根本から矯して行かなければいけない。今日に於ては、モウ國中の人が皆がこの國を背負つて立つだけの覺悟を有たなければいけない。いけないと思つたらその日から止めるが宜い。善いと思つたらその日から實行するといふ勇氣を有たなければいけない。そこがどうも、我國に今のところでは足らない。いけない事でもマア〳〵と言つていゝ加減にやつて居る、善い事でも今直ぐやるといふ譯に行かない。「いづれその内に」と言ふ。日本には茲に又うまい語がある、「いづれその内」と言ふ、何日の事だかわからない。友達に出會つて「御無沙汰を致しました、いづれその内に上ります」と言ふ。いづれその内といふのは明日だか、明後日だか一年後だか、十年後だかわからない。うまい語があるものだから、さういふ語を勝手次第に使つて、いづれその内〳〵と言つて何もしないで死んでしまふ。

それはマア世の中が無事ならそれでも宜しいけれども、今井上さんの仰しやるやうに、内も外も大變な時ですから餘程この際覺悟しなければいけない。國際聯盟が何かやつて日本を經濟的に封鎖をするなら、封鎖されても宜いだけの覺悟をするがよい。私は素人で能くわからぬけれども、大體に於て日本人は今の半分で生活が出來ると思ふ。それは食ふに困つて居る人もあるけれども、贅澤をして居る人もある。日本ほど贅澤をして居る國はない、英吉利へ行つても、獨逸へ行つても、佛蘭西へ行つても、一流のホテルへ泊つても——と言ふと大變偉らさうですが、偶にチョット泊つて見た。一流のホテルで朝飯を食つても、獨逸邊りでは燒パン一片と牛乳一合、卵の茹でたのが一つぐらゐ附く、それでチッともみつともなくない。佛蘭西邊りでは卵も無い、大概燒パンとお茶ぐらゐで濟む。英吉利ではそれにハム・エッグスが附いて來る。所が日本では一流でなくして、私共が常に旅行してチョットした宿屋に泊つても、朝飯にお膳が二つ出る、この間も勘定したら七皿あつた。朝から七皿も列べて食つて居れば、大概國は潰れてしまふ。さういふ馬鹿な事をやつて居る。どうも縮が弛み切つて居るやうです。困る〳〵と言ひながら困らない生活をして居る、それで愬けて居る。さうして人に文句だけ言ふ、「助けて下さい」だけは言ふ。前にもお話がありましたが、助けて下さいなどと言へる義理ではない。農村が困るから農村を救つて呉れと言ふ、今度は商人が困るから商人を救つて呉れと言ふ。農村を救ひ、商人を救つて、景氣が好くなつて物價が高くなつたら月給取が困る、これも救つて呉れと言ひ出す。國中皆救はれる人ばかりで一體誰が救ふか。そんな意氣地の無いことを言つては仕樣がない。救つて呉れどころではない、皆自ら己れを犧牲にしてこの國を救はうといふ決心をしなければならぬ。今の場合に於て救つて呉れナンといふ、そんな意氣地のないことを言ふといふのは國を潰すものである。それが出來て居ない。どんなに苦しくても自分がやるより仕樣がない、自分の國である、斯ういふ時代に生れ合せたのだから仕樣がない、別に註文して生れた譯ではないが、どうも生れてしまつたのだから、その生れた時代をうまく乘り切つて行くといふことが、自分達の當然の責任である。斯う思はなければならぬ。

所が困ることには人間といふものは兎角我儘なもので、所謂煩惱が強い。世の中がだん〳〵酷くなれば、煩惱が酷くなつて來る。一切の世の中の事を見るとすべて煩惱の塊りである、俺が〳〵ばかりである。私は熟々思ふのですが、電車の中で夕方一錢五厘出して新聞を買つてそれを見て居る人が、こつ

ちが覗きに行くと斯うやつてそれを隠す。一錢五厘の新聞をそんなに大事にしないでも、側から覗いたら見せてやつたら宜ささうなものだ、それを「俺が買つた夕刊だ」といふので人に見せまいとして隠す。あゝいふ料簡である。皆が俺のものは決して人にやらない、さうして人の物は俺の物で取つて來る。これではうまく行かない。洵に人間が煩悩の奴になつてしまつたといふか、我利々々になつてしまつた。人の物は欲しいが、自分の掴んだ物は離さないといふ譯で、欲しい惜しいで一生涯お終ひです。

私が子供の時代に叔父さんに聽かされた「お前達が大きくなるとだん〳〵世の中が面倒になつて來るぞ、欲しいと惜しいで五十年だ」といふことを聽かされましたけれども、成程本當です、欲しいと惜しいで五十年、何もしないでその内に死んでしまふ。

皆がさういふ料簡で居るのは、これは教といふものが無いからです。佛法の教といふものは、人間に私を捨てさせる教である。いろ〳〵言ふけれども、根本は私を捨てさせる教である。自分といふものは一つの自分だと思つてはいけない、自分は縱には先祖から、後の子孫まで斯う繋がつた自分である。横には隣りの人から、又一軒置いて隣りの人から、周圍中の人に繋がつて居る自分である。自己といふものは一つのものではない、十文字の眞中の點である。皆さう思はなければいけない。十文字の眞中の點が自分だ、縱には永遠の昔から後の子孫に繋り、横には周圍中の總ての人に關係を有つて居る十文字の點だと思へば宜い。それを自分といふものを特別に一つの獨立したものだと思ふから、自分と人といふものが互に對立して喧嘩をすることになる。決してそんなに離れたものでない。さういふ心持を養ふ、それが大乘佛教の精神である。大乘佛教の菩薩行といふものはそれである。自分の私を捨てゝ、共に生きることを考へる、共に生きるといふ心持になれば極めて樂です。人間はやるか貰ふかどつちかでせう。貰はうと思へば苦しい、やらうと思へば樂である。親父に向つて、自分の親だから何とか子供の世話をして呉れるだらうと思つて親父を見ると、親父が如何にも冷酷に見える、「宅の親父は頭が舊くて仕樣がない」といふ愚痴が出る。又子供に對して、自分の子だから孝行して呉れさうなものだと思ふと、子供は如何にも厄介で、「どうもこの頃の若い者は氣に食はぬ」となる。それは皆求めるからさういふ事になる。獨身者で女房が欲しい、どうも下宿屋に居つては不自由で仕樣がない、女房を貰つて世話をさせようと思つて貰ふ。嫁に行く方も、親掛りでは思ふやうに買物が出來ない、一軒の主婦になつて自由に買物をしようと思つて嫁に行く。兩方求める所があるから、サテ夫婦になつて、「どうも貰つて見ると思ふやうに世話をしない」と言ふ、「行つて見るとあまり買物も出來ない、これは仲人に騙された」となつて來る。大きい事、小さい事皆それです。

取らうといふ心持を廢して、與へようといふ心持になつたらどうであるか。一切の物が自分の爲に存在するのでなくして、自分が一切の爲に存在するのであるといふ確かりした心持になつたら、どんな苦しい事でも、どんな辛い事でも乘つ切れない筈はない、それが東洋の文明の中心を成して居る思想である。お釋迦樣は「慈悲」と言ひ、孔子は「仁」と言ひ、老子は「道」と言ふ、皆それである。自分を捨てゝ大きなものゝ爲に盡さう。天地は我が爲に存在するにあらずして、我は天地の爲に存在する。斯ういふ心持が東洋の思想の眞中を貫いて居る大きな思想である。佛教を學ぶにしても、儒教を學ぶにしても、その思想を本當に捉へて行く。さうしてその心持を以て國を護つた時に於て、國は立派に護られ、その心持を以て家を守つた時に、家は立派に發達し

て行く、斯ういふ確かりした心持をお互ひが有たなければいけない。飯粒を水に漬けて置いたやうに、ふやけてしまつてはいけない。今はふやけてフワフワして居る、確かりしなければいけない。

さういふ心持がなければ、どうしてこの難かしい所を越えて行くことの出來よう筈はない。私共は本多上人の御生前に始終さういふことを教へられた。確かりしなければいかぬ、偽教の精神、佛教の精神、日本の國體を貫いた精神、斯ういふものを打つて一つにして、自分のものとして押し進んで行かなければいかぬ、懶けてはいかぬ、ぐづ〳〵してはいかぬ、怖れてはいかぬといふことを始終教へられた。その教へられた教を今活かして行く時が來たのである。今本當に大事な時が來て居る。お互ひが此處で結束しなければ、再び斯ういふ時期は來ない。長く生きたつてそんなに百まで生きるものでない、本多上人も大分お壯健なやうでしたけれども遂くなつてしまはれた。私共も今に死んで行く、此處に居る人も皆早いか遲いか死んでしまふ、百まで生きる人はありはしない。その短い命の間に、吾々は朽ちないもの、滅びないものを遺さなければいけない、百年生きたつて無意味に生きれば生きないも同じである。一年生きても、本當に意義有るやうに生きれば、一年の命は永遠に國を護つて行く、斯ういふ事を確かり考へて、必死の覺悟をきめなければならぬ時だと思ひます。

それであるから、今この財團の出來たことは洵にお目出たいが、實はこれからです、出來た財團をどう活かして行くか、たゞ財團が出來て、理事が出來て——理事の方を前に置いて失禮ですが、さうして帳面が立派に出來たつて、それだけでは詰らぬ。中味を良くしなければいけない。それにはお互ひが、これは理事の諸君もお骨折になりますが、又吾々のやうな餘所から野次馬に飛出す者も一生懸命に力を協せて、これを健實に發達さして、今顯本法華宗の管長が、將來力を協せるといふことを仰しやつた、あゝいふ事を皆覺えて居つて、若し力を協せないやうな事があつたら、「あの時何を言つたのだ」といふやうに持つて行かなければならぬ。さうして一つにならなければいけない。さうして更に他へ及んで、日本國民全體が一致團結する、斯ういふことになつて行かなければならぬと思ふ。

初めは少しで宜しい、初めからさう大きい團結は出來はしない。初めは少しで宜しいが、總ての者が本當に力を入れて行きさへすれば、それは幾らでも大きいものになるのであります。その心持が出來るか出來ないかといふことが今日の大問題である。

であるから私は今日は「お目出たう」といふことをまだ言はない、これから少し經つて言はうと思ふ。財團が出來たゞけでは私はチッとも目出度くないのです、その出來たものがどんなに動いて行くかといふことを見た上で、その時更めてお目出たうを言ふ。若しそれがいけなければ、お目出たうを言はないでモウ私は諸君と交際はない、斯ういふ事になるかも知れぬ。甚だ亂暴な話でありますけれども、どうか將來私が今日の失言を手を突いてお詫を申上げ、更めて「お目出たう」を言ふことの出來るやうに、折角諸君の御活動を願ひたいと思ひます。（拍手）

偶語

海軍少將　岩野直英

皆樣永い間のお骨折で財團法人統一團といふものが出來まして、これからいよ〳〵法の爲、國の爲に

御活動になることになつたのであります。私は今日は來賓として招かれまして甚だ光榮に存じますが、どうぞ今後とも非常に有益な會として、社會からも國家からも認められるやうにお成りになることを、切に希望する次第であります。

財團法人統一團といふことになつた以上は、それは普通の宗教團體ではない、國家政府が干渉し監督するところの一つの團體でありますから、餘程たゞの宗教團體以上に頭腦を運らして働かなければならないと考へます。先刻理事長が御挨拶になつた精神は洵に當を得て居るやうに私も思ひまして、この會が國に認められ、國から感謝を受けるだけの活動を爲さるやうに、單に顯本法華宗とか日蓮主義の一つの團體、お題目を唱へて、法要をし、法話をする一つの團體といふやうなものであつては、私は不足を感ずるやうに思ふのであります。折角財團法人統一團といふ固有名詞が附いた以上は、國家的の仕事の方に今後は全力を注がれて、その力の泉源となるものは勿論日蓮主義でありますが、日蓮主義を宣傳するだけ、或は日蓮主義を學ぶだけを以て、財團法人統一團といふものではなからうと私は考へて居ります。

今日は顯本法華宗の笹川管長が出席されるといふことで、今までの經過の間では、顯本法華宗の管長が出て來てお目出たうと言ふことは、この會の行掛り上、ない譯でありますが、更迭された管長が出席して此席でお祝辭を述べられるといふことでありましたから、私は一層興味を有つて今日はお招きに應じて出席した譯であります。何卒あなた方の活動の原動力は、本當に日蓮主義に限るのでありますが、その活動の舞臺、さうして働き掛けるところの相手は、宗教信者に限らず、日本全國民を相手にして御活動になつて、さうして大に成績を擧げられるやうにお願ひしたいのであります。

兎角このやうな團體といふものは、無事に選んで時日を經ますといふと、たゞ集つてはお經を讀み、或はお題目を唱へてそれで喜んでお終ひになるやうなものになつてしまふ。それから講演をやると言つた所で、お坊さんにしても若い人が在り來りの宗教談をするといふことに流れてしまふ。それが一番やさしいのだからどうしてもさうなつてしまふ。そんなことでなく、非常に熱のある、さうして刺戟の强い、又興奮性のある、感激性のある良い教は、吾々は既に本多日生上人から與へられて居るのである。足りなければ又他からも教を受けて宜いのだけれども、斯ういふ確實な教を吾々は握つて居るのだから、あまり宗教々々といふので、拜め〳〵でやるよりは、統一團は寧ろ國家的に働いて貰つたら大變宜くはないかと豫て思つて居つたのであります。先刻理事長の申された意氣は、その方にあるやうであつて、私も此席に出席して更に嬉しく考へる次第であります。それだけ感想を申上げて御挨拶に代へます。（拍手）

釋尊と統一開顯の大教

本佛教會主　和賀義見

一

一切の社會人心の動向は過然に生起するものではなくして、必ずや深く淵源する處があつてそれが或事柄を緣として現はれるものでなければならない。

そしてその深く淵源する處とは一種の宗教心それである。その宗教心より種々の思想の潮流が流れる、その思潮は轉て行動化せられて社會の種々相を形づくる。從つてその宗教心の內容が正しい道に契合するものならば、それから緣由して起る行動も割合に中正な場合が多いのである。

之に反して、その信念が中正を失して居るものであるならば、從つてその行動も又或偏つた弊害を生ずるに到るものである。

祖師が『正法亂るゝが故に鬼神亂れ、鬼神亂るるが故に國土亂る』と示されたのは此の謂に外ならない。

現今の我國狀は果してどういふ狀態であらうか。不安と行詰つた氣分とがあらゆる方面を覆ふてゐる。人心は極度に萎縮し、その反動として色彩の强い刺戟あるものを迎へやとしてゐる。此の行詰りの狀勢を打開するには如何なる政治乃至社會機構を必要とするか。又我國民は如何なる覺悟に立たなければならぬか。

今や我國民は重大なる岐路に立つて、而もその進むべき方向を明確にしてゐないのである。阿含に、佛出世當時の新興國たる摩訶陀國と跋耆國の間に戰端が開かれやうとした時に、佛は左の七ヶ條を擧げて、正しき國は破らるべきものでないことを說かれた。

一、統治者と被統治者の和合一致せること
二、人々が國法を遵奉すること
三、その國政が正しく協議せられてゐること
四、父母師長に恭順なること
五、婦人に對して眞正潔淨なること
六、寺院神社を尊敬すること
七、宗教家に正しき保護と支給をすること

此の明文に今日の我國狀を對比して見る時に、憂憤の情止むることが出來ないのである。內治外交に亘つて最も重大なる秋、もし一步を誤らば千載に恨を呑み、永久に臍を噛むの憂を遺すに至るであらう。故に重ねて統一の大敎に鑑み、吾人の理想とその實踐を明確にせんと欲するのである。此の正しき宗敎を顯すと言ふことが、文化を創造する上に於ても、社會を改善する意味に於ても、國を充實せしめてその持つ處の大理想を實現せしめる意味に於ても第一

に考へられなければならない點である。

二

幾多宗敎のある中に於て、印度に於ける所謂外道の思想は、あらゆる宗敎思想を網羅せるものと言ふべきであるが、特に釋尊が出世せられた當時に於ける外道の齎らした弊害を、阿含經には斯の如く示されてゐる。『慾に著して下賤の業を樂ふ、凡人の所業なり、身を苦しめて自煩自苦す。無義と等し、賢聖の業にあらず』と言つて、徒に身を苦しめ或は肉感の快樂を貪る兩極端を戒められてゐるのである。

又思想的に最も誤り易い諸點を擧げて、他作、自他作、無因等のとるべからざる處を指摘してゐる。

他作といふのは自分の苦しむ原因が他から來るものであるといふ樣に考へて、責任の所在を自己以外の處に置かうとするのである。即ち神の意志に依つて苦しめられるとか、社會の機構制度が惡いから苦しむとか、他人の呪詛に依つて苦しめられるのであるといふ風に考へることであつて、責任を自己の上に置かない考へ方である。

自他作といふのは、その感受する處の境遇が自己と自己以外のものとの兩方から來るものであるといふ考へ方で、之は割合に進んだ考へ方である。社會的にも共同責任といふことは可成重大性を持つ道德觀であるが、然し此の考へ方は、共に責任を持つべき者が無責任な態度をなす場合に、自分のみ正義を守つても世の中が惡い以上、自分一人でその責任を全ふすることが出來ない。結極自分だけ努力しても詰らないといふ風に考へて、最後の責任の所在が無くなつてしまふ。

即ち此の二つの考へ方は、お互に責任のナスリ合をするやうになつて、現代に見るが如き世の中が展開せられるのである。

無因といふのは偶然論である。萬一を僥倖とする生き方であつて、確信のある命を打込だ仕事が出來ない。だから道德的にも社會的にも正しい生き方といふものが無くなつて來る。故に佛陀は『無因にして生ずとは我又說かず』と仰せられて、之等の誤れる思想態度を折伏せられ、飽く迄自己の生活態度の上に社會改造の重點を置かれたものである。但しそれは個々の安心修業のみを言ふのではない。社會の事

柄は相互關係即ち因緣の上に成立するものであるから、社會的立場を離れて考察せらるべきではない。此の事は後に述ぶることにする。

又當時に於ける宗教は、一面波羅門教の系統を引いたものは、眞劍論をもてあそび、形式至上主義をとり、最も頑迷なる階級意識に鎖ざされてゐたのである。

之に反して最も新しい立場をとらうとした沙門團の中には、可成唯物的な順世派の如きものもあつて、端極より極端、尖端より尖端と進むものも少くなかつたのである。

玆に如來は『二邊を捨てゝ中道をとる』と宣言せられ、古きを修め新しきを作る(涅槃經)と言つて佛教徒のとるべき態度を示されたのである。

然し阿羅羅迦藍乃至醫陀迦羅摩子等の思想に到つては、甚だ佛教に近きものがあつて相當に佛教徒としても參考となるものが少くなかつた。けれども彼等の思想は終に行詰る運命に置かれてゐたのである。

一例を擧ぐれば、彼の阿羅羅迦藍が本性(本體)と變化(現象)とを說き『本性とは地水火風空なり』と說いた時に、悉多太子は『身前とやせん業前とやせん』と言つて、身命が先にあつたのか業が先にあつたのか、その何れが先にあつたのかと追究せられて、彼阿羅羅は言究したのであつた。更に『汝が建立する處の大梵天王は劫盡きて天地崩るゝ時には何れの處にかある、又その宮殿は遂に破れざるなきか』と急所をさゝれて、阿羅羅は沈默してしまつたのであつた。

又羅摩子が父の說を紹介して『相非相なりと言はゞ大患なり』と言つて非相非非相の說を提唱した時に太子は『汝は父の說を述ぶるに過ぎない、汝自身に體驗を有せざる限り、遂にとるべからざるものである』と言つて之を捨てられたのであつた。

斯樣に佛陀が之等の教をとられなかつた所以のものを、而も今日尙佛教徒の中に、之等の外道の範圍を出でざるが如きものを以て、佛教なりと思惟してゐるが如きは、悲しむべき痛恨事であると言はなければならないのである。

乍然、之等外道の教もそのよいものに至つては全く佛教に來るべき段階を辿りつゝあつたものと言つてもよいのである。

開目鈔に『外道の所說は內道に入る即ち最要なり』と說かれたのがそれである。

三

佛教に入つて之を考ふるに、可成宏範なものがあるのであるが、大別して小乘と大乘とに分たれる。一體人間の欲求する處のものは、福幸をよそにして之を談ずることが出來ない。然るに佛教は先づ最初に於て『人生は苦なり』と言つて、如何なる境遇の人でも免かるゝことの出來ない四苦八苦を擧げて『三界は安きこと無し尙火宅の如し』と警告せられるのである。

佛教が斯く人生苦を明らかに指摘して、迂闊な態度を以て生活に臨んではならないことを戒める爲に、佛教は緣起が惡い消極的である、人生を捨つるものであるといふ風に考へて、詰らない誤解を持つた例が少くなかつたのであるが、それは皮相な見解に過ぎないのである。

昔の武人が治に居て亂を忘れざるが如き、又武士道は、武士の最期命を終らんとする時の心得を最も大切に教へて、そこに平生の見事な振舞が出來たのである。

之等のことを考へ合すれば、自ら佛陀の人生に於ける諸苦を說かれた態度が解せられて來るのである。

又此の危い苦しみを前以て知り得たと言ふことは、非常な喜を感ずる場合があることも見逃してはならない。

さて、佛陀はその人生苦を說くと共に、その苦しみの依つて來る所以を明らかに示されたのであつた。これは人間に不公平を憤る心、總てを疑問の儘に放置することの出來ない人間性並びに懷疑の果は人生並びに自らの生存の意義を否定し、社會を呪ふに到る傾があることを思へば、殊に宗教的に重大な意義を持つものである。

孔子の經國濟民の大願も『天德を子になせり』といふ信念にあつた。ユダヤの聖者は、神の一人子なりといふ自覺の上に、救世者としての自覺に立つたのであつた。しかもその志天に通ぜず、神に通ぜざる時『桴に乘じて海に遊ばん』と言ひ、『など神我を捨て給ふや』等と哀愁を訴へるに至るのである。

之等は聖者の人間的な半面を物語る興味ある事柄であるとしても、一般の人々にあつては、苦しみに當面してその苦しみの依つて來る原因關係が明らかにせられなければ、終に天を呪ひ、神を否定し、人生を呪詛するに至ることが少くない。と同時にその理由の明らかにせられたることに依つて、此の苦しみから將來に於て免れ得る方法も自ら明瞭にせしめられて來るのである。

斯くして佛陀は人生苦並びに、その依つて來る所以の道を明らかにすると共に、更に進んで人生最高の理想とこれに到達すべき手段とを明示して、苦、集、滅、道の四諦の教を說かれたのであつた。十二因緣の思想も、此の四諦觀を詳述したものと見るべきであり、菩薩行として敎へられた六度も、涅槃の理想を實現すべき方法であつたのである。

之等の敎は一佛乘と言つて、佛の理想に到達せしめんが爲の大悲より發した手段であつたのである。法華經に『小乘を以て化すること乃至一人に於てもせば、我則ち慳貪に墮しなんこの事は爲めて不可なり』と說かれたのが、その謂である。

之等四諦十二因緣に關する事に就いては、詳細は他日に讓ることにするが、小乘に於ける因果觀即ち業感緣起の、外道に異る所以は、外道は我なる生命があつて、その生命が業に依つて天上界なり、人界なり、畜生界なりに運ばれるといふ考へ方で、即ち業が運般の役目をするものであるといふ樣な風に考へる處にある。之に反して佛敎は、業そのものが、經驗の積聚として我々の性格そのものとなり、轉て將來の行爲を生み出す力となつて、即ち第二の我を創造するのである。であるから、業そのものの塊が我が生命であるとも考へられるのである。

此の考へ方が消極的な方向に働く時、そこに種々の弊害を醸すのである。

元來佛陀の本意は、總べての經驗を悉く有意義のものたらしめ、價値あるものとして働かしむる所にあつたのである。

例へば、人生のあらゆる事實、暗黑の方面なり光明の方面なりを味はひ盡した人が、世の爲人の爲に我慾を捨てゝ一切を奉仕しやうと覺悟した時には、その人の經驗した暗黑面は今は光明となつて働く力である。然るに消極の一面に執した結果は、此の業に依つて苦報を受くるのであるから、業なり乃至その業の依つて起り來る無明即ち生命力を除滅しなければならぬと考へたのである。こゝに人間の生きんとする潑溂たる生命活動を制限することになつて、全く無氣力な小乘佛敎となり果てたのである。であるから佛陀の境界たる涅槃を見ることに於ても、灰身滅智と言つて肉體並びに心の働きを否定してそこに理想の境地が得られると考へたのであつた。從つて修業の方法に於ても、餘りに戒律に捉はれ人間性を否定した爲に悲慘なものが少くなかつたのである。その結果は次第に退嬰的になつて『何事も見ざる言はざる聞かざるは唯佛にも勝るなりけり』と言つた樣に深く山林に交はつて生ける人生の建設を忘れたのである。

そこで此の消極的な小乘運動に飽き足らず、大乘運動の勃興を見るに至つたのである。

先にも述べた如く、小乘敎徒は佛陀を見ることに於てその偉大性と永遠性とを甚だ制限して了つたのである。故にその偉大性と永遠性を見やうとして法身報身の思想が起つて來たのである。宇宙の本體或は大生命といふ樣なものを以て佛と考へ、不滅なものをさうした哲學的の立場に置かうとしたのは毘盧遮那佛大日如來等の法身の思想である。

又一面には因果の上から修業に依つて成佛せられた關係を引延して寶藏比丘の修業と阿彌陀の十劫正覺を說く。元來因果說の嚴格な意味から言へば、不完全なものが如何に努力しても、不完全な修業しか出來ない筈である。不完全な因から、完全な果を得ることが出來ないと言ふ此の論理を打開すべく寶藏比丘の四十八願が說かれたのであつた。此の四十八願は非常によい事柄を四十八ヶ條を擧げて、その修業が如何に完全に近いものであるかを力說したものであらう。

こゝに卽ち報身の如來觀を生じたのであつた。斯うした行き方と違つた方向をとつたものに般若陶汰の思想がある。これはあらゆる名題を擧げて、悉く不確實なる認識を否定し、斯くして無限に否定の順序を辿ることに依つて眞龍を捉へやうとしたのである。

之等を總括して權大乘と言ふのである。斯うした考へ方は佛教の價値認識の上に擴大性と永遠性を與へる上に、可成効果を奏したのであるが、反面に於て哲理に流れ觀念に墮し假空的な存在に憧憬する餘り、現實を忘れて人生中心の佛教の大目的を失するに到つたのである。そこで實大乘の興起を餘儀なくせしめられたのである。

實大乘とは即ち法華經の教である。法華經には二門あつて、一を迹門と言ひ、二を本門といふ。

迹門の思想は、三乘の權を開いて一乘の實を顯はすと言つて、いろ〳〵の手段方法は、衆生を成佛せしめやうと言ふ一の目的にあることを指摘し、五佛同道と言つて過去、現在、未來、此の土、十方の佛は悉く此の同一の目的であるといふことを明らかにして、小乘に於て小さく價値評値せられた佛陀も、哲學的に大きく考へられた法身の佛も、人格的に因果の關係を說いて理想化された報身の佛も、同一水準に置いて優劣の差を立てず、そこに釋迦如來の價値を大きく認識して來る處が、迹門の佛陀觀でなければならない。

斯く如來觀の上に平等を說く處、直ちに衆生の上に差別觀を設けた考方を啓蒙して、總べての衆生は皆成佛し得ると、二乘作佛の大教が述べらるゝに至つたのである。これが迹門の理感と稱せらるゝ所以である。乍然、此の考へ方には尙殘されたものがあるのである。そこで本門の大教が宣說されて來なければならないのである。

前にも述べた如く、宇宙の大生命などと言つて法身の佛を說き、その偉大性を說いたのも又因果の關係を人格の上に說いて阿彌陀如來と說明した報身の佛も、結局小釋迦の應身觀を一轉せしめやうと言ふ豫備段階に過ぎなかつたのである。

過去、現在、未來、此の土並びに十方の佛は同じ道を以て衆生を救ひ給ふことを說かれて一切の佛を同じ水準に置かれた迹門の考へ方が、轉て本門の本佛觀へと發展するのである。何となれば、三世十方の佛を說き、法身報身の如來觀を說いたのも、それは釋迦如來の偉大性、價値性、救濟性並びに悟の內容等を把握すべく又表現せんとして試みられたものであるからである。言ひ換へれば『毘盧舍那の遍一切處』といひ『無量壽無量劫如來』と言ひ『涅槃妙心』といひ『楞嚴三昧』といひ『諸法實相』といひ、之等は皆釋迦如來の獲得せられた境地を各方面より表徵せんとして試みられたるものに外ならないからである。故に奪つて之を論ずれば、それらは本佛釋尊を離れては存在の資格を有せざるものと言ふべく、又假空の論談なりとせられても、異議を申立つべき資格のないものである。

日蓮聖人が『法華經に壽量品ましまさずんば天に日月のなからんが如く、山河に玉のなからんが如く人に魂のなからんが如し』と仰せ遊ばされたのは此の謂に外ならぬと信解し奉るのである。

即ち一切の佛は壽量本佛の活動の一片輪であり、而して本佛釋尊は久遠實在の大人格なることを光顯せられたのが、日蓮聖人畢生の努力であつたのである。そこで本門壽量の釋尊とは如何なる佛であらせられるか。宇宙の大生命であるとか、生命體系であるとか、或は耶蘇教の神の如き概念に墮るとか、色々なことが論議せられてゐるけれども、それは皆現實を忘れた概念論である。

佛教は釋迦佛に始まり、而して一切衆生が釋迦佛と同じ價値標準に引上げられること、即ち成佛を以て究竟の理想とする。成佛の中から菩薩業が生れ、又成佛に到達せんとして菩薩道を闢むのである。然らば佛教たる以上、釋尊を離れては何物もないと言ひ得るのである。佛教の中に幾多流派を生じたのも、それは釋尊に對する認識の相違より起つたものでなければならない。そこに小乘、權大乘、實大乘等の相違を生ずるに到つたことは上述せる如くであるが、卒直に吾人をして言はしむれば、釋迦如來の價値を絕對に光顯し、之を支持せられた處に日蓮聖人の本佛觀が成立すると言はなければならない。

本門の十妙といふのも、その價値性を十の方面から力說したものである。

釋尊の價値の絕對性が信せられないとならば成佛の義は成立たない。宇宙生命とか、生命體系とか乃至我等の成佛とか、國土の成佛とか言ふ事柄は、釋迦如來の價値性が働いて、始めて言ひ得られることである。

宇宙の組織構成が『法界無盡』と說明せられやうが

『一念三千』と說かれやうが、その組織をその儘尊しとすることは出來ない。その組織體が本佛釋尊を中心とせるものなるが故又その釋尊の價値內容たる悟、慈悲を以て血となせる統一體系なるが故に尊いのである。此の組織體が時間的にも空間的にも非常に微妙な相關關係を齎すものなることを考へた時此の組織の構成分子たる我等の生活態度が、個々の動物性不完全性を以て働きかけられる程危險なことはい。そこに飽くなき貪慾の生活あり、妄迷なる生活あり、鬪爭あり、破壞あり、最も恐るべき世の中が現出するのである。であるから此の一大組織體が本佛の御心なる妙法に依つて働く時、最も麗はしい人生が實現するのである。

であるから我等の奉ずる釋尊とは、孤立して制限的に價値評價せられた佛を言ふのではない。三千盡十方の組織に働きかけ、その價値が永劫不變の意義をもつ偉大なる釋迦如來を以て本門の釋尊と仰ぐのである。

釋迦如來の現身は丈六と八十年の制限をもつけれども、その體驗せる價値は絶對永劫遍一切のものであり、そしてあらゆるものに向つてその同化力が働く。久遠實成の釋尊とは、釋迦佛の內容並びに働が、無始久遠劫より未來永劫を解決せられたるの謂であらねばならない。

此の本佛中心の組織體を國家の上に之を見れば天皇中心の立憲政治であり、又此を經濟制度の機構にあてはめて考へれば、天皇中心の國家統一の經濟制度である。之を思想教育の上に開顯すれば、統一文化運動であり、統一人格的教育である。而して事の一念三千と稱せらるゝ法門も結局は人生宇宙の組織體が、本佛の御心なる妙法に契合して活動する相でなければならない。

阿含の根柢を探りて（其三）

中村清一

藏通別圓と正系傍系

前段に於て吾々は阿含の教を界內の事教であると說明する天台大師の教判について一言する所があつた。聊か繁雜になるやうではあるが、阿含の解脫觀に結末をつける必要上、この天台大師の四教說について少しく說明して見たいと思ふ。

三藏教――界內、事善
通　教――界內、理善
別　教――界外、事善
圓　教――界外、理善

界內といふのは、既に述べたやうに、この人生に於て直ちに理想的な涅槃の境涯を體驗しようとすることであつて、別言すれば人生以上に超人間的な理想の境地を設けないことをいふのである。それ故に之を內在的若しくは現實的解脫觀と名けることが出來るであらう。之に對し界外といふのは人生以上に理想の境地を打立てゝ行くのであるから、超越的若しくは理想的解脫觀と稱すべきものである。事善といふのは實踐的な行によつて事實的に解脫を得ようとすることであり、理善といふのは直觀的な思惟によつて觀念的に解脫を得ようとすることをいふのである。さて阿含の教は一面からいへば超越的解脫觀と見るべき點もあるが、しかし佛を現身の釋尊と見るのであるから、それは人間が人生に於て達することの出來る解脫の境地であるといふ點より內在的又は現實的な解脫觀と見られてゐるのである。そうして之を得る方法としては釋尊の示さるゝ現實的な修行によるものであるから、結局阿含の教は界內の事教といふことになつて三藏教の中に攝せられてゐるのである。次に、通教といふのはやはり人生の中に於て體得し得る解脫の境地を理想とするものであるが、その內容が智慧を本位とする所謂般若波羅蜜の空觀に他ならぬのである。般若の解脫を得たるものはそれを以て直ちに佛と同一の境地に至れるものと考へられてゐるのであるから界內の教であり、般若が思索的であり觀念的である點が理教である。第三の別教といふのは『歷劫修行』などゝいつて非常に長い間菩薩の修行を積み漸々に進んで行つて遂に超越的な佛の位にまで達すると教へるのである。かの法藏菩薩や善財童子の修行の如きものがこの型に屬するのである。第四の圓教は內容的には超越的な解脫觀であつて佛といふものを非常に高い立派なものと見てゐるのであるが、而も吾等はこの境地に現實

界から直ちに進み得るものと說くのである。即ちこの境地を一念三千の觀法によつて自ら開き、或は信仰によつて現世の中に味ひ來世に實際に獲得しようとする（この場合には決して觀念的解脫ではない）のである。即ち超越的實在的解脫觀であつて而も智慧とか信仰とかいふ精神的な方法によつて直接に之に達しようとするのであるから、之を界外の理敎といふのである。

さて何故にこの樣な四つの區別が設けられたかといふに、それは畢竟圓敎があらはれるための階段をなすものと考へられてゐるのである。（一）先づ最初に三藏敎では釋尊を生ける模範者としてその通りの修行方法によりその通りの覺を得ようとするのであるが、しかしその覺そのものは却々困難であるといふ所から、方便としての將來の無餘涅槃といふものが立てられたのである。しかし無餘涅槃を立てゝもそれは人間がその心身に於ける束縛を脫しようとするのであるから、矢張人間的のものである。從つてそこには淨土といふ樣な特別の理想境が立てられてゐない。（二）しかるにかゝる無餘涅槃の理想は佛の覺そのものを離れてしまつてゐるのであつて、これでは理性的な佛弟子達にとつて到底最後の滿足を得ることが出來ない。そこで之を否定して直接に佛の證に達しようとする所に大乘の敎が起つて來るのであるが、今度は、前の現實的修行によつては容易に目的を達し得ないといふ所から、先づ通敎では佛の覺を知的に考へ智慧の修行によつて之を體得しようとするのである。（智慧といつても勿論實際の修行を伴はねばならぬのであるが、その最後の解決を智慧によつて求めて行くのである。）（三）ところが又智慧を得ただけでは未だ人生の現實的束縛を脫してゐるとはいひ得ないのであるから、宗敎的に熱烈な人はどうしてもこの知解脫以上に更に超越的な絕對的現實的解脫の理想を立てゝ進むことゝなるのである。そこでこの理想が非常に高遠なものである限り、之を達せんとすることは僅かに二世や三世の短き修行によつては到底能はぬといふことになるのであつて、それが即ち別敎に說かれた歷劫修行の思想に他ならないのである。（四）そこで最後にはこの高き理想を更に人生に近づけて來なければならぬといふ所から、人間の本性の中に既に絕對の佛の姿を具へて居り、一瞬の解脫によつて直ちにこの偉大なる本性をあらはして佛になるといふ圓敎の成佛觀が成立つて來るのである。『今簡單な譬喩によつて之を說くならば、三藏敎は卵が鷄にならうとして殼を破つて行くことであり、通敎は殼の中の卵の生命が直ちに殼を破つた鷄であるといふ觀念的な自覺を持つことであり、別敎は卵が漸次生長して實際の鷄になつて行くことであり、圓敎は現實の卵の中に直ちに現實の親鷄があつて殼を破れば直ちに現實の親鷄が飛出すといふ積極的な奇蹟的な敎を說くのである。即ち圓敎は『妙法經力即身成佛』といつてそこに佛陀及經典の不思議なるはたらきを敎へてゐるのである。

右の四敎の中、通常三藏敎を小乘といひ、通別圓の三つを大乘といつてゐる。それは三藏敎は直接に佛の覺をとかず大乘のみが佛の覺に到達せんとするものであるとの見解からいはれてゐるのであらうが、實は阿含の特色といふものは、佛の覺を說かない、求めないといふよりも、寧ろその說明が消極的であつて全面的に完成してゐないといふ方が適當であらう。而してこの說明を完成するものは、通敎別敎の如きものではなく、寧ろ三藏敎は直接に圓敎と結びついてゐるのである。であるから之を未完成といふ點より見れば別圓二敎に劣るといふことになるが、之を完成したるものより翻つて內容的に考察すれば、通別二敎が中途のものを結論としてゐるの比し却つて圓敎にも通ずる最高のものを說いてゐるとも考へられるのである。

阿含の敎を聲聞乘の側より見れば、それは明かに四敎の中最初にして又最も低き階段に屬するものと見られるであらう。即ち通圓二敎に比しては事の敎たる點に於て劣り、別圓二敎に比すれば界內の敎たる點に於て劣るといふことになるであらう。詳言すれば、事の敎であるといふ點は、現實の修行による限りいつまで經つても容易に佛の如き絕對不動の境地に到達し難いといふことになり、界內の敎であるといふことは、消極的否定的なる解脫觀に止まつて居て積極的實在的なる常樂我淨の宗敎的理想の境涯を說かないといふことを意味するのである。然るに

之に反して阿含の教を佛乘を本位として開顕的に見るならば、阿含は必ずしも右の様な局限せられた内容に止まつてゐるのではない。寧ろそれは事の教たる點に於て通教に勝り界内の教たる點に於て別教に勝つてゐるともいひ得るであらう。何となれば通教が實踐を超えて般若の智慧に重きを置いたといふことは、一面には佛の覺を人間の直接到達し得る現世的のものにする上に効果があつたのであるが、然しそれは佛の覺の超越的な眞の偉大さを否定したことになるのである。(勿論般若の思想が全部かゝる現世的觀念的なものであるとは云ひ難いのであり、さればこそ天台大師は般若經の圓教を力説されたのであらうが、然し通教として見る限り般若はどこまでも現世的のものである。)少くとも知解脱のみで宗教的滿足を得たと考へるのは増上慢に陷れるものといはねばならない。是を經には『一切の空經は有餘の説なり』といつたので、空の思想だけではどうしても眞の宗教にならないのである。之に反して阿含の教説にはたしかに佛の覺の超越的な偉大さを示してゐる。而も之を實踐的に體得しようとする所に困難が存するのであるが、之は結局圓教に現れる信仰といふものによつて解決されるのである。從つて阿含は確かに未完成であるが、それは吾等の信仰に達する素地として欠くべからざるものといふべきである。即ち、吾等は本來の原則上からいへばどうしても自分の修行努力によつて涅槃の境涯に達しなければならぬ次第なのであつて、而も、内に本有の佛性を具へ外に本佛の絶對的なる加被の力を蒙ることによつて、そこに内薫と外薫とが和合し秘妙不可思議なる妙法の得脱をなすことが出來ることになつてゐるのである。この點からいへば通教が現世的なる般若の空觀で一應停止せんとするに比し、阿含の教が知解脱に走らず實際の果報を求めて行く點はたしかにその長所であるといはねばなるまい。

次に別教の界外の教に比し阿含が界内の教を説いてゐるのは果して阿含の欠點としてのみ目さるべきものであるかどうか。是は非常に微妙な興味ある問題であらうと思ふ。別教が清淨眞如を説き或は他方の淨土を説き、現實と菩提、娑婆と淨土を切離す方向に走つてゐることは、是は界外の教といふことの中に存する一つの欠點であると見られぬであらうか。而して圓教がこの欠點を解決する意味合はその界外の超越的な理想も實は現實の人生そのものに具はつてゐる所のものであり、煩惱と菩提、現世と淨土も決して別物ではないと論證する點にあるのであるが、それは又一面に於てたしかに界内の教といはれる阿含の特色でもあるのである。阿含は十界互具とか一念三千とかいふ理論の説明をしてゐないけれども、現實の釋尊が直接に五蘊を破つて一切の現實的束縛を脱したる絶對の境涯に達し給へる事實は、人間そのものゝ本性に對して最も驚異的な面も光明的な斷定を與へたものといはねばならないのである。唯だこの釋尊の境涯について未だ統一された積極的なる説明を與へてゐない點は爭ふことが出來ないのであるが、その消極的な又は部分的な説明の中に示されてゐる内容は結局法華經の本門に説かれた最高の教にも通ずるものである。かくて一切經の最後の心髓たる本佛の實在、衆生の佛性、本佛釋尊の絶對的なる救濟の力等等の内容は勿論阿含の中にそのまゝあらはれてゐるといふことは出來ないのであるが、然し阿含の教の大體の方向はかゝる最高の教に向ふ素地と考へらるべく、又在世の弟子達の關する限り、當時に於ける現身釋尊の直接的感化は暗默の中に吾等に對する本佛釋尊の感應と同一のものを授けて居つたことは特に注意を拂ふべき點であらうと思ふ。阿含の教が現實の基礎の上に立ちつゝ而もその内面に佛陀の超越的なる覺を蘊蓄し、法華の教が絶對の眞相を説きつゝ而も決して現實の基礎を離れて居らぬといふことは、兩々相俟つて現實と理想との離れざる双關互具の關係を教へてゐるのであつて、これが佛教を見る上に最も大切な着眼點であると思ふのである。

この點より見れば阿含――法華涅槃を佛教の正系思想と見る恩師日生上人の教は必ずしも天台大師の四教説と矛盾するといふわけではなく、寧ろ天台大師が阿含を尊重し日蓮聖人が『阿含經即法華經』と開顕せられた佛教の正系思想に則り、而もそれを最も鮮かに教へられたものであると思ふ。阿含經は實に佛教の出發點であり源泉である。如何なる教も阿含に根柢を持たざれば、佛教の眞義に徹したるもの

ではない。吾等が法華經を佛教の最高教義となす所以のものも、法華經が阿含に示されたる問題の歸結を最も完全に又最も開顯的な意味に於て與へる教であるからである。阿含と法華との相關關係を味ふことは阿含及法華の兩者の眞價を發揮する所以であるのみならず、實に一切經の最後の歸結について動かざる斷定を得る所以であると思ふ。

是を前の譬喩についていふならば、阿含は主として卵の殼を破ることについて教へ、法華は卵が破らるゝ時に直ちに現はるゝ親鷄そのものについて論じてゐるのである。殼が破れたとき卵がそのまゝ破られてしまふか、その中から雛鷄があらはれるか、或は直ちに親鷄があらはれるか、それは殼を破るといふそのことによつて直ちに決定される問題ではない。從來阿含の教は卵の破壞によつて直ちに卵の生命そのものをも殺してしまふ樣な所謂灰身滅智の意味に解されてゐたのであるが、これは少くとも阿含の佛乘的方面に對し理解を缺く所の淺き議論である。寧ろ、阿含の教の深き意味を味ふならば、殼を破つてあらはれるものはあらゆる方面に完全圓滿なる親鷄の如きものでなければならぬと考へられるのである。之に反して通教は殼を破ることに重きを置かず卵のまゝで既に鷄と同じ内容を具へてゐると自覺するものであり、別教は卵が種々の中間形態を經て最後に親鷄になるのである。それ故にそこには確かに圓教の最後の教をかくす方便的な意味合が存することを免れないのである。從つて華嚴方等般若の如きも純粹性を缺く點に於て寧ろ傍系的であるといふことになるであらう。阿含も勿論聲聞乘は傍系であるが、それは佛乘と區別せらるべき純粹の方便であるが故に、決して佛の覺の内容を引下げる意味になつて來ないのである。かくて阿含の佛乘が未完成なると權大乘の佛乘が不完全なるとの差によつてそこに正系と傍系とが明かに區別されることゝ思ふのである。

是と同時に阿含と法華とは現實を現實として直ちにそこに最高價値の内在を認める點が勝れてゐると思ふのである。蓮華が汚泥の中にありて清淨なることは佛教の全部に亘つての理想をあらはすものであるが、それは阿含——法華涅槃の正系佛教によつて最もよく示されて居る。他の教は何等かの意義に於て現實を否定して理想に向ふ一面がある。例へば、空教は現實を空と考へることにより通常の考にあらはるゝ差別的現實の具象的なる姿を輕んずること、なり、(阿含も所謂析空觀を說くが、それが局部的誘導的のものであることは後に述べる。)清淨眞如は波を否定したる不動の水を得んと求める。或は現實を粗笨に解して菩提の眞意義を忘れる順世的の教もあり、或は他方の淨土を求めて現世の德教を輕んずる教もある。然るに眞に俗世間の華としてこの現實の中に最も高き菩提の理想を實現せんとする態度は正系佛教に於て最も圓滿に示されゐると思ふのである。之を要するに現實の尊重と宗教の最高理想の確保とを兩ながら具へてその間に密接なる關係を見て行く處に佛教の眞義があるのであつて、そこに阿含及法華經の如き教の卓越せる所以があると思ふのである。

記事

財團法人統一團々報

本誌八月號既掲の通り、本團は其目的達成上現在の品川に事務所を置いたのでは、豫期の活動も不充分である關係上、幾多の難關を排除して市中躍進を企てた。幸に上田理事長の英斷を以て小石川區音羽町六丁目十七番地に數十坪の更地を購入し、七月十九日夫れ〳〵手續完了し、工事設計に及び迅雷疾風八月十三日灼熱の炎天に上田理事長式長となり、小西日喜師を導師として地鎮式を擧行した。當日の言上文は左の如く御寶前に捧讀された。

財團法人統一團會館建設地鎮式言上文

維時昭和七年八月十三日財團法人統一團理事長上田長卯愼ミ敬テ　壽量ノ大本尊　宗祖立正大師恩師日生上人ノ御前ニ白サク

曩日　恩師ハ人心教化ノ要ヲ示シテ云ク『武力經濟ノ難ハ猶ホ霍亂ノ如ク思想ノ難ハ實ニ癩菌ノ如シ荏苒空過シテ遂ニ悔ヲ千歲ニ貽ス勿レ』ト　因テ刷新ナル淨刹ヲ建設シ大ニ教戰ヲ進メムト劃策ヲ繞ラサレシガ偶々其實果ヲ見ズシテ遽カニ遷化

シ給ヘリ　今ヤ世相ハ風雲彌々急ニシテ國ヲ擧ケテ非常時ト號シ第五國難ノ機ト稱ス　上下其ノ擧措ニ迷ヒ萬民其ノ歸嚮ヲ失シ專ラ偉聖ノ再來ヲ仰望スル甚タ切實ナルアリ　志アル者誰レカ座視ヲ許サン哉

幸ヒ不肖等　恩師ノ遺業ヲ繼承シ臣子トシテ又佛子トシテ法國ノ爲メ聊カ之カ報答ヲ期セント願シ此地ヲ相シテ本園ノ淨舍建設ヲ圖リ爰ニ幹部一同相聚リテ地鎮ノ盛典ヲ擧行ス　仰願クハ南無上來勸請ノ諸尊　天照太神八幡大菩薩等本朝大小ノ神祇　別シテハ恩師日生上人等哀愍守護我等並ニ建築從業員ヲシテ懈怠過誤ノ障魔アルコトナク恒ニ心身清淨ニシテ所願圓滿成就ナラシメ給ヘ

南無妙法蓮華經

昭和七年八月十三日

財團法人統一團

理事長　上田辰卯

當日は梶木師其他數名の幹部は、乍遺憾或は遅參或は旅行等なりしが、恩師日生上人の御遺族は非常なる滿悅で、都喜子夫人を代表として參列遊ばした。酷暑の折柄なれば各方面への御案内は御遠慮申上げた。不日上棟式が行はれる。希くは團員各位の倍々協力御清援を祈つてやまぬ。

本財團御寄附醵出者芳名（自七月十日至八月二十日）

一金六百六拾圓也　東京　佐藤梅太郎殿
一金壹百五拾圓也　同　本多禮三殿
一金五圓也　同　白井勢市殿
一金貳拾圓也　同　高木鎰三郎殿
一金壹百圓也　横濱　相馬興信株式會社殿
一金參圓也　東京　菊地雄三殿
一金拾圓也　同　小西日喜殿
一金參拾圓也　同　沼部彌太郎殿
一金拾貳圓也　同　小川吉助殿
一金參百圓也　同　難波芳松殿
一金貳拾五圓也　同　鈴木日雄殿
一金參圓也　同　菊地雄三殿
一金四拾圓也　千葉　小澤元重殿

新團員加盟

神田區旅籠町三ノ二　山本道雄氏
同　多町一ノ五　澤田正六氏
本郷區弓町二ノ二九　松本操子氏
小石川區指ヶ谷町一三七　岩瀨たけ子氏
京橋區京橋二丁目三ノ四　片岡勝次郎氏
本所區綠町四ノ二十紀部方　星野庸一氏
同　町四ノ三十　田中峰太郎氏
同　町新立川橋西入北側　河野五郎氏
府下砂町治兵衛三一六　西山隨義氏
府下吾嬬町西四丁目三四　豊島松太郎氏
深川區本村町六八磯部方　吉野正雄氏
本所區菊川町一ノ四十關澤方　松林五郎氏
同　厩橋四ノ二三稻垣方　露木徹芳氏
（以上梶木顯正師紹介）
横濱市中區壽町一ノ二九　長久保德太郎氏
相州鎌倉町小町三二四　松木喜八郎氏
（磯部滿事氏紹介）

教報

財團法人統一團活動誌

七月二十六日　午後五時より報恩閣に於て同師會の協議會が開かれ、從つて今晩は講師が多い爲めに三味線堀側會の場所以外に同所より約一町程距りたる四ツ辻に第二會場を設けて、左記の番俗に因り各十二分の能力を發揮した。即ち第一會場では梶木顯正師、磯部滿事氏、木郷常次郎氏、小西日喜師、第二會場に於て田中道爾氏、和賀義見師、河合陟明氏、中村清一氏、山口智光師。双方共に聽衆は大道を塞し、來援の各男女が交通整理を分擔され幸に事故もなく十一時前に閉會した

八月六日　連日の旱天續きに夜分に入つても冷しさうにもない中を、玄題旗と大太鼓の響に人々は之れ幸ひと忽ち三味線堀の例會場は黒山の人でうづもれた。今晩は珍らしく小山口師の開會の辭に始まつて、磯部滿事氏は日本國の現狀と日蓮聖人の御精神のあつた處を一時間餘に亘つて責任講演を行ひ。續いて本郷常次郎氏は順々として宗教の本質を語り各自の大なる反省を促し。最後に田中道爾氏は國家の危機から轉ぜて福となすの妙術を敷衍し、當に定刻を過ぐるを以て乍遺憾閉會とした。群衆の善男善女に數百のリーフレットを與へて名殘惜しくも引揚げた。山口師、池田氏、吉野氏、其他二三の來援者は熱心に交通整理に忙がしく奉仕された、

同十六日　一ヶ月に亘る連日の炎天も漸く昨夜から降り續けて人々はホツトした。午後に入つて雨は止んだが空には黴さうな雲が一

杯覆うてゐる、幸にも六時過には次第に薄雲となり漸く滿月の美しい姿も見えたので、櫻木師の導師で報恩講の勤行を了り急いで例の會場へと陣取つた。忽ち群衆に取まかれて勞顯櫻木顯正師は人生の眞意義と題して醉生夢死を誡め向上の正路を辿るべく惡敎され。續いて磯部滿事氏は時局匡救と宗敎と題し櫻本的敎濟は人心の敎化にありと叫び、人心の敎化は宗敎に基かざるべからず宗敎は普通多くの人の考ふる如きものでなく一つの整へる敎義を有し其事柄を示す所に宗敎はあるとて、宗敎は考へてゐるものでなく敎に依つて精神を支配し日常の行動を善導するが故に實行を除いては宗敎でないと例證譬喩を擧げて詳說し、最後に本郷常次郎氏は國民思想の基準の題下に、益々この思想問題の復雜せるを能く徹底明瞭を與へ遂に定刻を過ぐる十分餘。幾多の來聽にリーフレットを施與し磯部氏閉會を宣し、櫻木師は之より千葉縣の喜張へ、磯部氏は横濱へ、本郷氏は四谷へと各家路さして繰しげに別れた。來援者は二小山日師、池田氏、齋藤氏其他にて殊に齋藤氏よりは大きな西瓜の御供養に預つたことを厚く感謝する。

二本松通信

七月一日午前六時五十九分二本松驛通過にて平壤歩兵第七十七聯隊益谷中尉の遺骨郷里宮城縣福谷町に向へり因つて出迎へ讀經す。

七月二日午前五時五十三分二本松驛通過にて龜山野砲兵第二十五聯隊伍長本田健智氏の遺骨新殿村に向ふ因つて出迎へ讀經す。

七月三日午前一時二十六分二本松驛通過にて第七師團管下の北支部に派遣さるべき部隊滿載せり因つて歡迎す。

七月六日午後二時二十一分二本松驛通過にて歩兵第四聯隊六基野砲兵第二聯隊四基偷奪原隊に歸る因つて出迎及讀經す。

七月十五日二本松佛敎不染會托鉢修行。

七月十五日夜於蓮華寺題目講修行。

七月二十日午前〇時八分二本松驛通過にて偷奪部隊陣鐵工兵下士以下三十二名渡滿す因つて歡迎す。

七月二十日午後一時五十七分二本松驛通過にて一等看護長菊地次郎氏の遺骨福島市に向ふ因つて見送讀經す。

七月二十一日本田砲兵伍長の本葬にて弔電を送る。

布敎の旅空

去月廿一日東京出發以來內地、朝鮮各地十數回の講演を終了し本月二日滿洲國奉天着。軍司令部訪問、忠靈塔參拜、これより北行ハルビンへ。日持上人の事蹟を追ふて。大法宣傳の身大壯健。

八月二日　日暮光道

御注意

一、團費、誌料は總て前金に願ひます

一、「前金切」御注意致し二ヶ月に及ぶも御拂込なき場合は乍遺憾御送本見合はすことあります

一、集金郵便は參圓以上にて其取立には團費誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します

一、御轉居の節は必ず新舊双方を御明記御通知下さい

再び統一誌御講讀の各位に懇請

拜啓　益々御健勝奉賀候、陳者前月號御報道の通り統一團は先般『財團法人統一團』と改稱せられ、本誌は本團の定款第二條第三號に依り財團法人統一團の機關誌と相成申候、就ては從來本團員以外の單獨に誌友として本誌御講讀を忝ふせし各位に於かせられては、此の國家非常時に際會し本團の目的及事業御賛同の上、團則第五條に依り正團員に御加盟願上度、猶進んで賛助又は維持團員に御復活之程法國の爲め切望仕候

一々拜趨御承認御願可申上筈に御座候得共自他の事務簡省を期し乍勝手以誌上御懇請申上候、隨つて本月中に何等御申聞けなき場合は便宜上御快諾を得たる事と存じ元簿修正可仕候間豫め御諒承奉願上候

昭和七年九月一日　敬具

財團法人統一團

假事務所　東京府品川町南品川四一二一

追而統一振替口座は今回財團法人統一團の口座に併合致申候間御用向の節は東京九四二〇本團宛に願上度候

財團法人統一團規則

第一章　名稱

第一條　本團ハ財團法人統一團ト稱ス

第二章　目的

第二條　本團ハ日蓮主義ヲ以テ人心敎化ノ爲メ必要ナル事業ヲ行ヒ理想的文化ヲ建設スルヲ目的トス

第三章　事業

第三條　本團ハ事業遂行ノ爲メ左ノ二部ニ分ツ

(一)總務部　一切ノ團務ヲ統轄シ幹部會ノ協定ニ因リ之ヲ養處ス

(二)教務部　人格向上ヲ期スル爲メ之ニ適スル教化事業ヲ施行ス

第四章　事務所

第四條　本團ノ事務ヲ處理スル爲メ本部ヲ東京ニ支部ヲ適當ノ地ニ置ク。支部ノ設立ハ理事會ニ於テ之ヲ決定ス

第五章　團員

第五條　本團員ヲ左ノ四種ニ區分ス

(一)名譽團員　本財團ノ爲メ特殊ノ功勞アリタル者ハ維持會ノ決議ニ依リ之ヲ推薦ス

(二)維持團員　五ヶ年間、毎年金壹百圓以上ヲ醵出シ又ハ一時金參百圓以上ヲ寄附シタル人

(三)賛助團員　團員ノ推薦ニ依リ申込書ヲ理事ニ提出シ理事會ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

(四)正團員　申込書ヲ提出シ毎月金貳拾錢以上、又ハ毎年金貳圓貳拾錢以上又ハ一時金參拾圓以上ヲ寄附スル人ニシテ理事會ノ同意ヲ要ス

團員選擇セントスル時ハ書面ヲ以テ其旨理事ニ申出ツルコトヲ要ス

第六條　本團員ニ對シテハ本團ヨリ發行スル團報統一ヲ無料ニテ頒布ス

第六章　役員

第七條　本財團ニ左ノ役員ヲ置ク

一、理事　七名

二、監事　二名

第八條　理事ノ互選ニ依リ理事長ヲ置ク

理事長ハ本財團法人ヲ代表ス

第九條　理事及監事ハ維持會ニ於テ之ヲ選擧ス

第十條　役員ノ任期ハ二ヶ年トシ再選スルコトヲ得

第七章　會議

第十一條　理事會ハ理事ヲ以テ組織シ必要ニ應シ理事長之ヲ招集ス

第十二條　維持會ハ名譽團員　維持團員ヲ以テ組織シ毎事業年度ノ始ニ於テ理事長之ヲ招集ス

但必要アル時ハ臨時之ヲ招集スルコトヲ得

第十三條　本團總會ハ毎事業年度ノ始ニ於テ之ヲ開催シ前年度事務ノ報告ヲ爲ス

第十四條　理事會　維持會及團員總會ノ決議ハ出席議員ノ過半數ニ依ル、可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

第八章　會計

第十五條　本團ノ經費ハ基本財産ヨリ生スル收入、寄附金其他ノ收入ヲ以テ之ニ充テ餘剩餘アリタル時ハ基本財産ニ編入ス

基本財産ハ之ヲ消費スルコトヲ得ス

第十六條　本團ノ資産ハ理事長之ヲ管理ス

第十七條　本團ノ事業年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月廿一日ニ終ル

第九章　補則

第十八條　本團規則ニ規定ナキ必要ナル事項ハ理事ノ合議ニ附シ之ヲ處理ス

以上

一金壹圓貳拾錢也　千葉縣　中村正治郎殿
一金六拾錢也　濱松　佐伯有台殿
一金貳圓也　東京　森川泰修殿
一金貳圓貳拾錢也　同　越引弘殿
一金貳圓貳拾錢也　同　安江清海殿
一金貳圓貳拾錢也　同　長久保德太郎殿
一金貳圓六拾錢也　横濱　神作純吉殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　中田知一殿
一金壹　〃　也　千葉縣　小高典吉殿
一金參圓也　山口縣　大谷權次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　磯島品藏殿
一金貳圓也　岡山　吉岡正太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　淡路　青山信市殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　鈴木敬友殿
一金六拾錢也　同　勝見泰枝殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　川村善勝殿
一金壹圓貳拾錢也　京都　金光孝視殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉縣　笠義章殿
一金壹圓也　東京　齋藤リイ殿
一金壹圓也　同　遠山いよ殿
一金五拾錢也　同　菊地雄三殿
一金參圓也　鎌倉　松木喜八郎殿

有難有入候仕候也

財團法人統一團會　計

野口日主上人記念集編纂會謹告

今回故野口日主上人一周忌記念出版として編纂致し候、記念集『野口日主上人』左記の方々に御送附申上る豫定の處御住所不明にて困却致し居り候

御存じの方は乍御手數至急東京市本郷區春木町二丁目五十六番地伊東竹三郎宛御一報被下度候

市川重藏殿　小幡虎太郎殿
石下多光殿　小野吉松殿
長谷川鱗太郎殿　小川運平殿
長谷川松太郎殿　大熊靜子殿
長谷川隆三殿　川島浪速殿

（裏へ續く）

目次

法華經の信解（其五）……日生上人
億兆一心の秋……井上清純
歴史の肯定と超歴史的立場（其一）……河合陟明
落穂籠……上田辰卯
恐怖政治下の印度……ラス、ビハリ、ボース
社會と宗教……日暮光道
記事
○本團月報　○見聞錄
○寄附團費誌料領收　○編輯室より

第三十七年十月號

吉田猪七郎殿　上田たけ殿
吉田德太郎殿　久保田仁三殿
橘きぬ殿　安田喜十郎殿
高瀨恒次郎殿　藤原淺吉殿
中山喜八殿　松本榮子殿
長瀨亀吉殿　三島さく殿
長治クミ殿　三村剛殿
長澤鐵二殿　三原六松殿
中藤ミトヨ殿　三好國壽殿
中村常八殿　島田すが子殿
中村銀藏殿　島田平吉殿
土方みつ殿

松尾清明著
新刊 **國體本源論**
（御注文の節誌名記入を乞ふ）
定價金三十五錢
郵稅不要
△郵券代用お斷り。振替口座御利用あれ
自己の愛住せる大地の體格を克明に認識せずんば他の何事をも誤解するに至るべし。日本人たるもの先以て日本の國體を正解するを要す。此意味に於て本書をすゝむ。
千葉縣長生郡二宮本郷村
東天社
振替口座東京三三五三三番

昭和七年八月廿四日印刷納本
昭和七年九月一日發行（第四百五十號）
神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二〇番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　財團法人統一團
振替東京九四二〇番
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

統一定價

一冊	金貳拾錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢

送料五厘
前金之事
送料共